

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	サドにおける身体について
Author(s)	宮本, 陽子
Citation	フランス文学 , 23 : 24 - 36
Issue Date	2001-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041042">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041042</a>
Right	
Relation	



## サドにおける身体について

宮本陽子

18世紀小説の特徴のひとつとして、快楽を肯定的あるいは積極的に扱うようになったことが挙げられる。これに伴い、快楽の場所としての身体、快楽に関わる身体がより具体的に描かれてゆく。すなわち、全体としての身体というよりも、身体の部分に焦点が定められ、名指され、記述されてゆく。フーコーは比喩から直接的な名指しに至る古典主義時代のランゲージュの出発点に『クレヴの奥方』を、終局に『ジュリエット』を定めているが、<sup>1)</sup> たしかに、『ジュリエット』<sup>2)</sup>を筆頭にサドのいくつかの作品において、身体は部分に分けられ、名指され、かつてないほど徹底的にその裸形をむき出しにする。サドのこうした身体の記述が、作品のなかでどのような意味を持つのか、また、他の作家とどのような関係にあるのかを考察するのが、拙論の狙いである。

### 1

すでに18世紀以前から身体は文学的記述において重要な意味作用を担っていたが、身体そのものが具体的な記述の対象となることは稀であった。

17世紀後半に著わされた『クレヴの奥方』<sup>3)</sup>は、婚姻の絆と恋の板ばさみに苦しんだ主人公クレヴ夫人がみずからに快楽を禁じることによって幕を閉じる作品であるが、ここにおいても身体は重要な位置をしめている。クレヴ夫人が最後まで夫を愛することができなかったのは、少なくとも彼女にとって夫クレヴ公に身体的魅力がなかったからであり、クレヴ夫人とヌムール公が惹かれ合ったのは、互いの身体的魅力を認めたからと言ってよいほどである。しかし、わたしたちはクレヴ夫人の身体的特徴について、髪が金髪で、肌が輝くように白く、とにかく美しいということ以外に知りえない。また、ヌムール公についても「自然の傑作」と評され、多くの女性たちから愛されてきたこと、成熟した年齢であること以外に具体的な情報は与えられていない。それではなぜ、クレヴ公に身体的魅力がなく、クレヴ夫人と恋人のヌムール公には身体的魅力があると判断しうるのかといえば、クレヴ公については「若いのに慎重だ」<sup>4)</sup>と語られるばかりで、その身体についての言及がないこと、そして何よりも、クレヴ夫人がヌムール公に向けるようなまなざしで夫を見ることが一度もないことからである。クレヴ公の方は何度となく彼

女をうっとり見つめるが、彼の身体が彼女のまなごしを惹きつけることは決してない。一方、クレーヴ夫人は椅子を飛び越えてやってくるヌムール公に惹かれ、ジュードゥポムをしているヌムール公を眺め、騎馬試合に出ている馬上のヌムール公を見つめる。運動状態にあるヌムール公の身体がクレーヴ夫人を魅了する。また、クレーヴ夫人の方はクーロミエの別荘で夏の夜、他ならぬヌムール公が描かれている絵を見つめながら、われ知らず夢想に耽るしどけない姿を、庭にしのみび込んできたヌムール公のまなごしの前にさらす。この作品において、快樂については飽くまでも懐疑的にしか語られず、身体が具体的に記述されることはないものの、身体を見つめるまなごしとその魅力を保証する。

身体の機能は、恋するまなごしの前で快樂を約束するしるしとなることだけにとどまらない。クレーヴ夫人はヌムール公の前で何度となく顔を赤らめる。また、ヌムール公に心を打ち明ける前に彼女は「愛情と魅力のこもった目で彼を見つめ」、別れを告げるときは「涙で大きくなった目で彼を見つめ」る。このとき、ヌムール公は「彼女の足元に身を投げ出し、心の動揺のままに振るまい」、「(ことば)と涙で、およそ心に感ずることのできるもっとも激しいもっとも深い愛情を彼女に見せつけ」<sup>5)</sup>る。つまり、恋する身体はその内面にある心の動きを恋人に向けて発信し、読み取らせるものでもある。身体はパロール以外の表現で内にあるものを語る場所、あるいは装置としても機能している。

## 2

18世紀になり、快樂の肯定に伴い、身体に関する記述に変化が生じることがあっても、身体は相変わらず、人を惹きつけ、人に語りかけることをやめない。さて、18世紀に栄えたひとつのジャンルとしてリベルタン小説があるが、そこでも身体のような力は有効である。

ここで、リベルタン小説、あるいはリベルタンについて簡単に定義しておきたい。リベルタンという表現は名詞と形容詞の両方に使われる。17世紀において無信仰の者と、宗教道徳に反する生活態度を意味していたこの表現は、やがて良俗に反する放埒な生活をする人間とその態度を示すようになってゆく。18世紀リベルタン小説に登場するリベルタンは、自由な考え方や奔放な生き方を標榜し、快樂を追求する人物として定義することができるだろう。

リベルタンの欲望の対象は、したがって唯一無二の身体ではない。彼らは唯一の女性、唯一の身体に縛られることを拒絶する。すでに、17世紀の『ドン・ジュアン』にも確認されるように、誘惑し、消費し、放棄するというのが、リベルタンの典型的な行動パターンであり、彼らにとって重要なのは、快樂を提供してくれる身体を無限に消費することである。キリスト教的道徳が衰退すると同時に、台頭するブルジョワジーの勤勉と貯蓄を旨と

するイデオロギーが支配的になってゆく近代において、リベルタンというのはこうした趨勢にあがらうように、勤勉と貯蓄のアンチテーゼとして、放蕩と消費の量を業績とする。ドン・ジュアンが、「2たす2は4」<sup>6)</sup>という算数しか信じないと豪語するように、リベルタンにとって快楽を提供してくれる身体は、質ではなく量、数のレベルのものである。数とは、基数のことであって、序数のことではない。つまり、ここでは、出会いの順序や、それぞれの状態によって決定される優先関係はなく、ある身体が他の身体よりも価値があるというものではない。<sup>7)</sup> したがって、消費される身体の数量は無限に増やすことが可能であるが、リベルタンの体験には目的完了がないということになる。

万物をこうした数字によって語り直そうとする態度はキリスト教的な秩序、すなわち、天地創造から始まる時間の流れ、最も卑しいものから崇高なものに至る序数の秩序に対する拒絶であり、<sup>8)</sup> また、快楽あるいは異性関係を量のレベルに換算することは中世が発明し、西欧文明が育んできた愛の形の逸脱と言えるであろう。とはいえ、リベルタンと女性との関係はそれでも西欧文明の外にあるものではないことを強調しておきたい。つまり、ピエール・アルトマンも指摘するとおり、「契約」というものがどこまでも問題であるからだ。<sup>9)</sup> 神の定める婚姻という関係以外に、異性関係にひとつの文化的な様式を定めたのは、中世が発明した恋愛、「fin'amor」であるが、これは婚姻関係外にある男女の自由意志によって結ばれた契約にしたがって履行されるものである。男性は、意中の女性によって課された愛の試練に女性の定めた期間、耐えなければならず、また、務めを果たしたとしても、意を叶えてもらえるかどうかは女性の心ひとつである。<sup>10)</sup> さて、ドン・ジュアンが破るのは恋愛の契約ではなく、結婚という神との契約であるが、彼は結婚の約束をしては次々に女性を手に入れ、約束を果たさずに逃げるということを繰り返す。一方、『危険な関係』<sup>11)</sup>のリベルタン、ヴァルモンやプレヴァンは愛の約束をしては、快楽を味わったあとで、約束を破棄することを名誉とする。いずれにしても、契約の履行ではなく、契約を踏みにじることが問題になっているが、それでも、契約によって関係が結ばれ、契約を巡って出来事が展開されるのは中世以来変わっていない。リベルタン小説に限らず、男女間の物語はすべて、婚姻にせよ恋愛にせよ、契約や約束の問題を抜きにしては成立しないと言いうるであろう。

18世紀リベルタン小説が持つ、もうひとつのパターンは、教育ということである。たとえば、クレビジョン・フィスの『心と精神の迷い』<sup>12)</sup>では17歳の主人公が母親の友人リユルセー夫人やリベルタン、ヴェルサックによって、リベルタンとなるべく教育を受ける。また、ヴィヴァン・ドゥノンの『明日はない』<sup>13)</sup>では18歳の主人公が恋人の友人 T 夫人から、夏の一晩に、情事のたしなみ、巧みさとはいかなるものか手ほどきを受ける。このように、リベルタン小説における教育、イニシエーションは、キリスト教的道徳からは外れるもの

の、初心者を社交界というひとつの社会の行動様式のなかに導くものでありこそすれ、社会の外、文明の外に連れ出すものではない。リベルタンというのは成熟した文明社会のなかで、そこを司る約束事を熟知し、悪用する人物と言ってもよいだろう。

### 3

ところで、「文明」という意味での «civilisation» とは、18世紀の新語義である。以前は法律用語で、刑事訴訟を民事扱いにするという意味であった。これをミラボー伯の父、ミラボー侯爵が1756年、『人類の友、あるいは人口論』<sup>14)</sup>という著作のなかで、初めて、「社会性」という意味で用いた。以後、進歩、過程、完成等の意味が加わってゆき、野蛮の対極にある「文明」として定着し、ルソーを除く18世紀作家、哲学者たちがほぼ満場一致で、このことばを肯定的に用いることになる。<sup>15)</sup>ところが、サドはこの新語義の «civilisation» を否定するのみならず、さらに新らしく、«incivilisation» という表現を創出する。

残忍さとは文明 «civilisation» によってまだ墮落させられていない人間の活力に他ならない。したがって、残忍さは美德でありこそすれ、悪徳ではない。(…) 残忍さが危険なのは文明状態においてのみである。なぜなら、不利益を被っている者は往々にして攻撃をはねのけるだけの力や能力を欠いているからだ。しかし、反文明状態 «état d'incivilisation» においては、残忍さが強者に襲いかかった場合は強者によってはね返されるであろうし、弱者に襲いかかったとしても、傷つけるのは自然の法則によって強者に負けてしまう者だけなので、少しも不都合はない。(HJ. 69)

簡単に言うならば、サドは社会状態としての «civilisation» に、ホブズが言うような自然状態、あるいは戦争状態としての «incivilisation» を対立させる。わたしたちの関心はこの «incivilisation» のなかで丸裸にされた身体が、これまで «civilisation» のなかで語られてきた身体と如何に異なるかを明らかにすることであるが、本題に入る前に、サドが作品を書くにあたって、«civilisation» のなかにあるものと、«incivilisation» を目指すものの、二つの系列に分けて書き分けていることを指摘しておきたい。

二つの系列とはすなわち、署名入りで発表された作品群と、署名なしで発表された作品群にそれぞれ照応する。<sup>16)</sup> 前者には、演劇作品と書簡体小説『アリーヌとヴァルクール』<sup>17)</sup>、短編小説集『恋の罪』<sup>18)</sup>などが挙げられる。後者には、『ジュステイーヌ』<sup>19)</sup>、『新ジュステイーヌ』<sup>20)</sup>、『ジュリエット』、そして『閨房哲学』<sup>21)</sup>を数えることができる。さらに、バスチーユから移動させられる際にサドが紛失してしまった『ソドムの120日』<sup>22)</sup>も、書き

方と内容の点から、後者のグループに加えることができよう。いずれのグループにもリベルタンが登場し、善人を不幸な目に遭わせるが、二つのグループの決定的な違いは、内容においても、また書き方においても、前者は飽くまでも「civilisation」のなかにあり、後者は執拗に「incivilisation」を目指すところにある。

内容において「civilisation」のなかにあるということは、従来のリベルタン小説の伝統にしたがい、リベルタンが婚姻の絆、恋愛の約束と戯れ、踏みにじるというパターンを踏襲しているということである。つまり、婚姻の絆や恋愛の約束を信じる人がいて、それをリベルタンが裏切る。要するに、「civilisation」というのは、男女関係に限らず、人と人が契約によって結ばれている社会である。ルソーは『社会契約論』のなかで、個人と個人の利益の対立を調停し、社会の絆となって人々を結びつける「共通の利益」というものを想定し、これによって、さまざまに相異なる個別のものを「一般意志」として統合しようと主張しているが、<sup>23)</sup> じっさい、個々人をひとつの全体として統合するのが法であり契約であり、これによって文明社会の諸制度が保たれる。こうした社会のなかに身を置きながら巧妙にルール違反をする、つまり、全体から個の利益を掠めとるのが伝統的なリベルタンのあるべき姿である。

婚姻もまた文明社会における重要な制度のひとつであるが、サドが署名入りで発表した第一グループの作品では、いずれも「恋愛」の対立項としての「結婚」が重要なテーマになっている。ルソーの書簡体小説『新エロイーズ』<sup>24)</sup>におけると同様、書簡体小説『アリーヌとヴァルクール』においても、物語は婚姻制度と恋愛のあいだで展開する。ジュリーの父同様、サドの家長たちも娘や息子に恋愛を断念させ、無理やり結婚させることを使命とする。リベルタンで家長のブラモン法院長が、悪辣な手段で娘のアリーヌを恋人のヴァルクールから引き離すのも、放蕩仲間で金持ちの徴税官ドルブールと結婚させるためである。また、短編集『恋の罪』のなかの「アンリエット・ストラルソン嬢」のリベルタン、グランヴェルはアンリエットを彼女と相思相愛の婚約者から奪い、自分の妻にするためならば手段を選ばない。同じく、『恋の罪』の一篇、「ユージェニー・ド・フランヴァル」<sup>25)</sup>のリベルタン、フランヴァルは娘のユージェニーと近親相姦の関係にあるが、この愛し合う父娘が何よりも怖れるのは、フランヴァル夫人のすすめる結婚によって引き裂かれてしまうことである。いずれしても、この作品群においては、どんなに婚姻制度が悪用され、踏みにじられようとも、これが無効になることはない。犠牲者にとっても、リベルタンにとっても婚姻は婚姻として意味をなしている。リベルタンは婚姻の絆によって浸透された社会のなか、「civilisation」の枠組みのなかで罪を犯す。

一方、署名なしで発表された作品群において、「結婚」はもはや「恋愛」の対立項ではない。「恋愛」は物語の関心になり得ず、また、婚姻の絆に敬意を払うリベルタンはここ

にはいないからである。『ソドムの120日』において、四人のリベルタンは「フランス国外、住む人もいない森の奥、切り立った山を越え、ここに至る橋は渡ったとたん切断され、(… …) 侵入不可能な城砦」、法の及ばない場所、シリング城で、犠牲者たちを「友人や両親から引き離し、この世で死んだも同然 (SO, 66)」の状態、すなわち、「civilisation」の外に閉じ込める。そしてリベルタンたちの妻であると同時に娘である女たちに向かって、自分たちのような人間にとっては「神聖な絆などなく (67)」、親子の絆、夫婦の絆がここでは無効であることを宣言する。このシリング城において、いずれも妻帯者のリベルタンたちが美少年たちを妻とし、同時に絶倫男たちを夫とする。また、『ジュリエット』に登場するリベルタン、ノワルスイユはジュリエットに言う、「わたしは同じ日に二度、結婚したい。朝十時に、女装して男と結婚し、正午に、美少年を妻にしたい。(…) 君には、わたしが女になって男と結婚する同じ式で、男装し、同性愛の女と結婚してもらいたい。そして、わたしが男の服装に戻り、少女に扮した美少年と結婚するときに、君は女の服装で、男に扮した別の同性愛女と結婚してくれ (HJ, 1245)」。「civilisation」が「結婚」と呼びえないものを、「結婚」と呼ぶことは、「civilisation」の規定する「結婚」を無効にする。リベルタンの「結婚」がここで対立するのは「civilisation」であり、「法」である。

それでは、書き方において「civilisation」のなかにあるということはどういうことであろうか。「結婚」が有効な意味をもつ世界において、愛の対象の身体は多くの場合、欲望のまなざしをとおして語られる。『クレージュの奥方』のヌムール公が盗み見たクレージュ夫人は最低限のことば数で語られる。

暑かったので、彼女の頭や胸を覆っているのは無造作に «confusément» 束ねられた髪だけだった。(PC, 256)

『危険な関係』のヴァルモンはトゥールヴェル夫人の姿についてももう少し饒舌に、もう少し具体的に語る。

耐えがたい暑さのおかげで、彼女は一重の普段着を着ていたの、その丸みのあるしなやかな身体つきがわたしにはわかりました。彼女の胸を覆っているのはモスリン一枚だけでした。わたしのすばしっこく、鋭い目はそのうっとりするような «enchanteresse» 形を早くもしっかりと見抜いていました。(LD, 第六書簡)

いずれも夏の暑さという弁解つきで薄着になった慎しみ深い女性の身体が、これに対して

欲望を抱く男性のまなざしによって捉えられている。前者の «confusément» や後者の «enchanteresse» という表現はいずれも女性の身体を修飾するものであるが、同時に、これを見ている欲望の主体の心の動きを表していると言ってよい。サドの第一グループ、署名入り作品群においても同様の描写が観察される。

怖れと絶望のために溢れた «animaient» 涙が彼女の美しい頬をつたい、雪白石膏よりもはるかに白い、はだけた胸を濡らしていた。(HS, 153)

これは短編集『恋の罪』の「アンリエット・ストラルソン嬢」からのものであるが、アンリエットのこの悲痛な姿を見たリベルタン、グランヴェルは取り乱す «éperdu»。彼女の怖れと絶望がその身体をとおして、リベルタンの心を動かすのである «animer»。

これらに共通して言えることは、身体において名指される場所が髪や胸に限られ、これが名指されることによって、全体の魅力が想起されるものとしていること、そして、身体がその内にある動揺を表したり、あるいは見る者に欲望を訴えたりすることで、前にも述べた非言語的意味伝達の装置となっていることである。これを «civilisation» のコードと呼んでもよいだろう。

ところで、サドの第二系列、匿名作品群において、«civilisation» のコードによる書き方が悪意をもって適応されることがある。

雪白の胸のうでで乱れて波打つ黒いみごとな髪と、冷血漢の足を濡らす涙が、彼女たちの苦しみと絶望の痛ましい光景に、えも言われぬ趣きを添えていた。(HJ, 1142)

ここでは、苦しみ嘆く身体からの訴えが無視される、共感を呼ばない、つまり、«civilisation» のコードを解読しない、機能させないということが、逆に記述のポイントになっている。それどころか、この「痛ましい光景に」興奮したりベルタンは言う、「不幸のこうした悲劇的効果がどんなにわたしを夢中にさせ、勃起させることか!」。«civilisation» のコードが機能するには、身体には内面が隠されていて、それが身体によって語られうるということが、暗黙のうちに了解されていなければならない。

#### 4

それでは、«civilisation» のなかで身体によって語られていた苦痛や快感は、«incivilisation» を目指す作品群においてはどのように表現されるのか。そもそも、サドの言う «incivilisation», あるいは自然状態とはどんなものであろうか。第二作品群



のリベルタンたちは口々に、この «incivilisation», 自然状態こそが人間本来の在り方だと主張するが、それはすなわち、人と人がいかなる絆によっても結ばれることなしに、ばらばらに孤立した状態に他ならない。

人は誰でも孤立して «isolé» 生まれ、誰も互いに必要とし合うことはない。人間を自然状態のままにしておきたまえ。決して文明化しないように。そうすれば、それぞれ仲間を必要とすることなしに、自分の食べ物、生活の糧を見つけるだろう。

(HJ, 335)

これは『ジュリエット』のリベルタン、ノワルスイユのことばである。ここで使われている «isolé» という表現は、ドルバックがホッブズの自然状態、すなわち戦争状態について要約した文章に由来していると指摘されているが、<sup>26)</sup> ホッブズは彼自身が想定した、孤立した人間たちによる原初の戦争状態を決して奨励していたわけではない。人間は不幸にしてこうした状態だから、法のくびきが必要だとホッブズは説いたのであった。サドは啓蒙の哲学者たちの述べたことばを悪用し、まったく違う文脈のなかで意味を捻じ曲げてしまうことを喜びとしていたが、ホッブズもこうした災難を逃れることはできなかった。ともかく、この «isolé» という概念は、文明社会での共存を称揚する18世紀の哲学者たちの大半において否定的に使われた。<sup>27)</sup> ただ、サドだけが、«isolé» から «isolisme» という新語を作るほどこの概念を肯定的に用い、彼の匿名作品群のリベルタンたちは皆、こぞってこの概念を理想とする。ここでは、人と人の関係を規定するのは力のみとなり、これを社会と呼んでよいなら、強者と弱者しかいない社会が出現する。したがって、ここで行なわれる «libertinage» も、単なる道楽者の放蕩では済まなくなり、弱者にとっては常に命がけのものとなる。

そこで、弱者＝犠牲者にならずに、強者＝リベルタンとなるための教育が必要になる。『閨房哲学』においてはユージェニーが、『ジュリエット』においてはデビューしたてのジュリエットが、先輩たちから教育を受けるが、いずれも、感受性を根こそぎにし、«civilisation» によって沁みついてしまった道徳や観念に由来する感情を洗い流し、無感動状態になるすべを覚え、官能の喜びだけを味わえるようにすること、身体から内面を排除し、身体を自然状態、すなわち «incivilisation» の状態に戻すことが、第二作品群における教育の目的となる。<sup>28)</sup>

さて、身体から内面を排除したところで、リベルタンたちはこれまで «civilisation» のなかで身体によって語られてきた苦痛や快感を、«incivilisation» のなかで語り直さなければならない。弱者である犠牲者には発言権が与えられていないので、ディスクール

はもっぱらリベルタン固有のものとなる。『ジュリエット』のリベルタン、サンフォンによれば、苦痛とは、「私たちを構成している生物微粒子と外的異物の間に相関関係が欠如している結果に過ぎない (HJ, 412)」。また、他者の身体に引き起こされた苦痛を観察することによって覚える快感をリベルタンは次のように説明する。

通常、わたしが他人に与えたどんな苦痛も (…) わたしの精子を攪乱させる。そのため、むずむずするような欲望が掻きたてられ、わたしは思わず «involontairement» 勃起させられる。この勃起はわたしの心を動かすことはないが、相手の苦しみの程度に応じて、早かれ遅かれ、わたしを射精に至らせる。(NJ, 556)

これは『新ジュステイーヌ』のリベルタン、ロダンのことばであるが、『ソドムの120日』の非人称存在の話者も、リベルタンの快感を同様の表現で説明する。

相手の受けた激しい衝撃が自分の神経の塊に振動をもたらし、これが神経の窪みを流れる動物精気を刺激して、勃起神経を圧迫させるが、こうした運動から淫猥な感覚と呼ばれるものが引き起こされるのを、彼は感じる。(SO, 23)

いずれにしても、他者の身体に観察される苦痛がリベルタンの「精子」や「神経」に「攪乱」や「振動」をもたらし、リベルタンの「意志とは無関係に」彼を「勃起」させるというわけである。

ここにはヌムール公がクレーヴ夫人を盗み見て味わった喜びと心の混乱や、ヴァルモンがトゥールヴェル夫人を眺めることで覚えた陶酔はまったくない。ヌムール公の喜びもヴァルモンの陶酔も、欲望の対象が目の前から消えたあとでも彼らの心のなかに根強く残り、ふたりとも、一人きりなつて喜びを噛みしめる。愛の対象の身体は、不在になつても消えることのない、身体そのもの以外の何物かを、愛の主体の身体の内奥にある心に刻みつける。これに対し、«incivilisation» を目指すサドの作品における身体は、身体以外の何かを担った媒体ではない。心や魂のような無形のものとはいっさい無縁の、まったく裸の身体、苦痛や快楽の程度によって «involontairement» に反応する、一種の機械である。また、内面のない身体であるから、苦痛も快楽もその場限りのものであり、これを時間のなかで持続させたり、愛や憎しみに発展させたりすることはない。つまり、他のリベルタン小説やサドの署名入り作品群の要であった、愛や恋は不可能となり、誘惑もなければ契約も成立しない。欲望は時間のなかで実現されるものではなく、すぐに、一挙に実現されるべきものとなる。欲望の対象の身体はただちに裸にされ、裸の身体はただちに消費され

る。欲望と欲望の対象を隔てるものではなく、両者は即刻、無媒介に結びつく。ジュリエットの旅もしたがって、ひとつの欲望の対象を求める探求の旅ではなく、欲望の対象を繰り返し消費する、果てしない消費の連続となる。

## 5

さて、身体から内面が排除されたからには、快楽は徹底的に数量のレベルになる。ドン・ジュアンやサド以外のリベルタンにおいてもすでに、快楽は数量のレベルであると最初に述べたが、身体に内面が宿っている限り、完全な数量化は不可能である。少なくとも、一度にたくさんという発想は生まれない。例えば、『危険な関係』に登場するプレヴァンのように、どんなにやり手のリベルタンでも同時進行で三つの情事をこなす程度が関の山である。「2たす2は4」と言っていたドン・ジュアンも、二人の百姓娘、マルスリーヌとシャルロットの両方を一度に相手にすることはできなかった。足し算を掛け算にするためには、サドの第二群の作品を待たなければならない。後者において、差し向かいの快楽はありえず、ひとつの身体はそのすべての接続部分を用いてできるかぎり多くの身体と結合しなければならない。

ところで、大勢の参加による快楽がいったん動きだすと、ただひとつの快楽のグループがあるばかりで、わたしとあなた、自分と他人という区別がなくなる場合がある。『ジュリエット』の一節に、「三百人以上の人間がすでに集まり、裸になっていた」という記述のあと、「*on enconnait, on branlait, on se fouettait, on se gamahuchait, on se sodomisait, on déchargeait, et tout cela dans le plus grand calme. (HJ, 560)*」と続く文章がある。これはジュリエットの一人称体の語りによるものであり、この快楽のグループには話者のジュリエット自身も加わっているが、「on」という主体を特定しない主語の繰り返しによって身体の動作が強調されるのみで、誰の身体かということはまったく問題にされていない。身体は快楽の効率を追求する機械の部品でしかないと言わんばかりである。主体が快楽の結合体のなかに吸収されていると言ってもよい。主体の消失した身体が機械のように組み合わせたり、重なり合いながら、黙々と快楽に励む。文明に抗して、個の利益のために全体の利益を一切否定し、他者否定と自己肯定のディスクールを繰り返してきた主体が、多数の相手と多量の快楽を貪るために沈黙する、そのとき、相手と何の共感もないまま、つまり、「*isolé*」なまま、あっけなく他者との区別を失い、自らの身体から疎外されるさまがここにある。

他者の苦痛を見ることで、自らの意志とは無関係に反応する自己の身体について語るリベルタンは、たとえそれを物のように語ろうとも、他者に対峙する自己の主体として語っていた。少なくとも、快楽の主体として自らを語る事がリベルタンと他者との距離を保

証していた。しかし、沈黙のなかで実践される快楽はリベルタンと他者を無差別に飲み込む。内面の声を持たない身体にリベルタンを主体として結びつけているのは、ひたすら、主体として語ることは力の他にない。ことばの力こそが、沈黙の間に飲み込まれようとする無言の身体を奪還し、主体のもとに繋ぎとめる。

このように、時として快楽によって引き起こされた沈黙がリベルタンの身体を奪い、自己と他者の区別を失わせる一方で、リベルタンの身体が苦痛と快感の区別を解消するといった事態も起こる。これを嗜虐的快感と呼ぶには度を越している。たとえば、『新ジュスティーヌ』において、ジュスティーヌを鋼の棘のついたエックス型の十字架に括りつけ、彼女に「想像を絶する苦痛 (NJ, 1098)」を味わわせたリベルタンたちが、今度は自分たちも同じ目に遭ってみようと実行し、血まみれになって「ああ、なんという快感! (NJ, 1100)」と叫ぶ場面がある。あるいはまた、死の危険を冒しても、縛り首を受ける感覚を体験しようとする贖金作りのロランは、縄で首を締め上げられ、息が止まる寸前に、「法悦の表情を浮かべるとほぼ同時に、天井に向けて精液を迸らせる」。そして、うっとりとして言う、「この感覚は誰にも想像できない、ことばでは言い表せない (NJ, 1032)」。他者が苦痛として感ずるものがリベルタンの身体の中で快感に変換される。苦痛が快感に包括され、この二項対立が消滅するとき、意味が停止する。「想像を絶する苦痛」と「誰にも想像できない」快感が同一であると語ることは、リベルタンを快楽の主体として保証しつつも、同時に、このディスクールの主体を «sens» (意味/感覚) の麻痺する地点に至らしめる。

比喩の衣を剥がされ、「civilisation」を削除された身体の出現によって、古典主義時代のランガージュに終止符が打たれる。ここにおいて、ことばの力だけが物としての身体を主体に繋ぎとめるが、この身体は時としてことばの及ぶところをすり抜け、意味の停止をもたらし、主体を消失させる。神に代わって世界を語ることを旨とする人間中心主義のディスクールが、「想像できない」もの、「ことばで言い表すことのできない」ものを語ろうとするとき、そのディスクールは古典主義時代が想定していた「人間」の範疇をすでに大きく逸脱している。

## 註

- 1) Michel FOUCAULT, *Les mots et les choses*, Paris, Gallimard, 1979, p.134.
- 2) SADE, *L'Histoire de Juliette* (1801), Bibliothèque de la Pléiade, 1998, t.III (désormais *HJ*).
- 3) Mme LAFAYETTE, *La Princesse de Clèves* (1678), dans *Romans et Nouvelles*, Classiques Garnier, Bordas, 1990 (désormais *PC*).
- 4) *Ibid.*, p.255.

- 5) *Ibid.*, p.410.
- 6) MOLIÈRE, *Dom Juan* (1665), Classiques Larousse, Lanusse, 1991, III, 1, p.73
- 7) Jean-Marie APOSTOLIDÈS, *Le Prince sacrifié*, Les Éditions de Minuit, 1985, pp.161-173. Shoshana FELMAN, *Le Scandale du corps parlant*, Seuil, 1980, pp.47-49. 水林章, 『ドン・ジュアンの埋葬』, 山川出版社, 1996年, 224-22頁。
- 8) カッシーラー, 『啓蒙の哲学』, 中尾良幸訳, 紀伊国屋, 1962年, 51-52頁。
- 9) Pierre HARTMANN, *Le contrat et la séduction*, Honoré Champion, 1998.
- 10) *Ibid.*, pp.17-23.
- 11) LACLOS, *Les Liaisons dangereuses*, 1782 (désormais *LD*).
- 12) CRÉBILLON fils, *Les Égaréments du cœur et de l'esprit*, 1736.
- 13) Vivant DENON, *Point de lendemain*, 1777, 1812.
- 14) MIRABEAU père, *L'Ami des hommes ou traité de la population*, 1757.
- 15) *Dictionnaire européen des Lumières*, PUF, 1997, pp.219-225.
- 16) サドの作品のふたつの系列については, M. DELON は署名入り作品群 «officielle», 匿名の作品群を «ésotérique» と呼び分け, 前者を «gazé», 後者を «pornographique» な表現を持つものとする (Bibliothèque de la Pléiade, t.I, pp.XXI-XII)。また, P. HARTMANN は, 前者を «l'œuvre avouée», 後者を «les romans du système» と呼び後者を «incivilisation» と結びつける (*Op. cit.* p.331)。HARTMANN のこの著書には本論を書くにあたり, 多大な示唆を受けた。
- 17) SADE, *Aline et Valcour*, 1795.
- 18) SADE, *Les Crimes de l'amour*, 1800.
- 19) SADE, *Justine ou les Malheurs de la vertu*, 1791.
- 20) SADE, *La Nouvelle Justine ou les Malheurs de la vertu* (1799), Bibliothèque de la Pléiade, 1995, t.II (désormais *NJ*).
- 21) SADE, *La Philosophie dans le boudoir*, 1795.
- 22) SADE, *Les 120 journées de Sodome*, Bibliothèque de la Pléiade, 1990, t.I (désormais *SO*).
- 23) J.-J. ROUSSEAU, *Du contrat social*, Bibliothèque de la Pléiade, 1967, t.III, p.368.
- 24) J.-J. ROUSSEAU, *La Nouvelle Héroïse*, 1761.
- 25) SADE, *Miss Hanriette Stralson ou les Effets du désespoir* (désormais *HS*), *Eugénie de Franval*, dans *Les Crimes de l'amour*, Zulma, 1995.
- 26) SADE, *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, t.I, p.1269.
- 27) *Encyclopédie*, t.VIII, p.927

28) P.HARTMANN, *Op. cit.* pp.331-334.